

〔論 文〕

集団における対人関係と Ambiguity Tolerance

吉 川 茂

Frenkel Brunswik, E. (1949) によって Intolerance of Ambiguity が論じられた背景には人種的偏見の問題がある。つまり人種的偏見を強くもつ人々の心理学的特徴を統合して、それを Intolerance of Ambiguity と名づけたところに端を発し、次第にそれら人々の知覚に関する特徴を探究する方向へと研究は分岐し進展していったのである。

こうした経過からみれば、近年、社会対人的な研究は数のうえでは少なくとも当初からの重要なテーマの1つであることに変わりはない。個人レベルでの Ambiguity Tolerance-Intolerance の成立基盤が多数の領域で見出されてきたが(吉川, 1986a), それら個人間の対人関係の構造を集団レベルで検討する課題が残されており, Ambiguity Tolerance 研究のバランスを保つために必要である。

古くは権威主義やエスノセントリズムとの関係を調べた研究が数多くみられたが(Block & Block, 1952; Davids, 1955; Frenkel Brunswik, 1949; O'Corrner, 1952), 一般的な対人関係やその周辺を扱った研究はあまりない。Crandall, J. E. (1969) が Interpersonal Adjective Check List (Latorge & Suczek, 1953, Leary, 1957) を用いて, 他者への態度を自己評定させた研究がみうけられる程度である。その結果によると, Ambiguity Tolerance の低い個人は対人行動における従順 (docile) 様式に最高のスコアを示した。一方 Ambiguity Tolerance の高い個人は競争的(competitive), 攻撃的 (aggressive) 行動に最高スコアを示した。もっとも合理的な結論として, 「相対的に

曖昧さにイントレナントな個人は曖昧さにトレナントな個人よりもより好ましい (likable) 傾向がある」と述べられているが, 最後に「このような結論は, 実際のソシオメトリックな選択によって証明されるまではまったく仮の試案としておくべきであろう」と慎重な見解で結ばれている。ソシオメトリック的手法による集団レベルでの調査の必要性が示唆されている。

直接的でないかもしれないが, Ambiguity Tolerance と対人関係に言及した記述としては, Bellak, L. (1970) が『山アラシのジレンマ』(The Porcupine Dilemma) のなかでつぎのようなことを述べている。そこでは人間はエッグ・ヘッド, スクウェア・ヘッド, ファット・ヘッドという3タイプに分類される。エッグ・ヘッドは一般に知的で柔軟思考ができ, 曖昧さに対する許容度が大きいタイプの人間であり, 物事を多面的に吟味する能力を有するとされ, Ambiguity Tolerance 概念にほぼ一致する。スクウェア・ヘッドとはいわゆる石頭の人物であり, 権威主義的で物事の白黒をはっきりさせないといらいらするタイプの人間であって, 高度な知能をもっているにもかかわらず曖昧さに感情的に耐えられないとされ, Intolerance of Ambiguity 概念に対応する。ファット・ヘッドというのはいわゆるお人好しであり知性的でないタイプと述べられているが, 本論にはあまり関係しない。エッグ・ヘッドのもつ考え方は, スクウェア・ヘッドが没頭している自己中心的な悪循環を維持する基盤を根底からくつがえすおそれがあるため, スクウェア・ヘッドはエッグ・ヘッドを強敵とみなす。こうした Bellak の

考え方によって、Ambiguity Tolerance-Intolerance は単に個人内の特性としてあるばかりでなく、集団内で敵対・排斥しあう関係を形成するであろうと考えられ、両者はすくなくとも協調友好的ではないことが予想される。

以上のように Ambiguity Tolerance-Intolerance には集団内での対人関係のあり方を規定する可能性のあることが予測される。この対人関係様式へのアプローチとして、Study I では「集団内における相互的熟知度—被熟知度関係」について調査し、Study II では選択—排斥関係に基づく「学級集団内のソシオメトリック的分析」を行なう。

Study I

1. 目 的

個人の人格特性としての Ambiguity Tolerance は Ego Strength として包括されるようなポジティブな心理学的特徴を多く示し、他方 Intolerance of Ambiguity は不安や神経症傾向と強く関連するという実験データが得られている。(吉川, 1984, 1986a) そこで今回は個人のみに注目するのではなく、個人間のより実際の対人状況において Ambiguity Tolerance がどのように影響するかを調べたい。

集団内の対人関係の結びつきを、他者についての熟知度および他者からの被熟知度という観点からとらえ、そのうえで相互熟知—被熟知関係における Ambiguity Tolerance の関わり方を検討したい。

かつてこの領域の研究はほとんどなく、仮説を明確に設定することは困難に思える。ただし Intolerance of Ambiguity の特質から考えると、知識の空白部分を不安に感じやすいため、他者への熟知度評定を高く見積もるかもしれない。またその結果として、他者への熟知度と他者からの被熟知度評定間のバランスに偏りが生じるかもしれない、不正確で不安定な対人関係が見出されることも考えられる。

2. 方 法

対象は大阪市内の保育専門学校1回生の1クラス67名である。クラス内の他者(66名)に対して自分がどの程度知っていると思うかを5段階で判断させ、これを熟知度(J)として、5～1点の範囲で得点化した。

◎熟知度：J

- J 5…ほとんどすべて知っている
- J 4…かなり知っている
- J 3…すこしぐらい知っている
- J 2…あまり知らない
- J 1…ほとんどなにも知らない

つぎに自己の判断のなかで立場を入れ替えさせて、自分はクラス内の他者(66名)のそれぞれからどの程度知られていると思うかを推測させ、被熟知度(H)とした。よってこの(H)は実際に知られている程度をあらわすものでなく、本人の主観的な解釈である点を強調しておきたい。

◎被熟知度：H

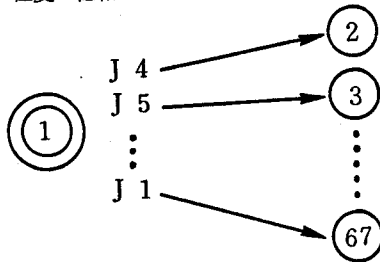
- H 5…ほとんどすべて知られていると思う
- H 4…かなり知られていると思う
- H 3…すこしぐらい知られていると思う
- H 2…あまり知られていないと思う
- H 1…ほとんどなにも知られていないと思う

ここでの熟知度J、被熟知度Hはどちらも、個人と他者との関係にある個人が66名の他者に関して判断したものである。それとは逆にその66名の他者がある個人をどれくらい知っているか判断した熟知度を[j]、66名の他者それぞれがある個人からどれくらい知られていると思うかという判断を被熟知度[h]と規定する。

以上の4種のスコア算出過程の理解のための図を Fig. 1 に示す。理論上の得点可能範囲は66—330である。たとえばクラス内の他者すべてに対して「ほとんどすべて知っている」と判断した個人のJスコアは $5 \times 66 = 330$ であり、仮にクラスの全員から「ほとんどなにも知らない」と判断された個人のhスコアは $1 \times 66 = 66$ である。

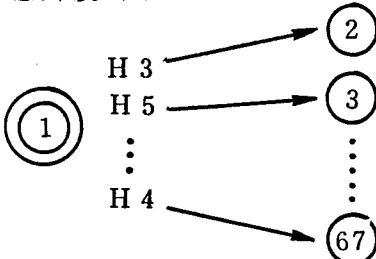
[J] 本人判断熟知度

ある個人が集団内の他者を知っていると思う
程度の総和



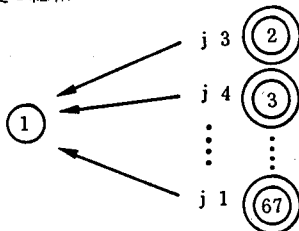
[H] 本人判断被熟知度

ある個人が集団内の他者から知られていると
思う程度の総和



[j] 他者判断熟知度

集団内の他者がある個人を知っていると思う
程度の総和



[h] 他者判断被熟知度

集団内の他者がある個人から知られていると
思う程度の総和

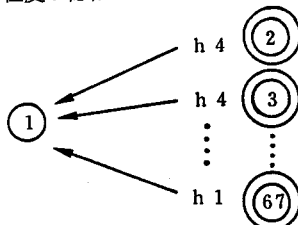


Fig. 1 熟知度・被熟知度に関する4種のスコアの
算出方法例

施行は学生名列表形式の用紙を12月の講義時
間に配布し、熟知度と被熟知度を別々に記入さ
せた。

Ambiguity Tolerance の測定には、MAT-

50 (Norton, 1975) の邦訳版を5ポイントスケ
ールとして使用した。

3. 結果と考察

まずデータの基礎的な整理として、本人判断
熟知度Jおよび被熟知度H、他者判断熟知度j
および被熟知度h、それらの差の絶対値、それ
らの和、Ambiguity Tolerance スコア (AT)
の平均と標準偏差を Table 1 に示す。

Fig. 2 には熟知度に関する4種のスコア相互
間の相関係数を示す。

Table 1 熟知度 被熟知度 ATの平均と
標準偏差

	M	SD
J	165.7	33.88
H	164.1	32.55
j	165.7	14.58
h	164.1	14.50
J - H	15.6	22.16
J + H	329.8	60.66
j - h	4.1	4.00
j + h	329.8	28.53
AT	156.4	19.23

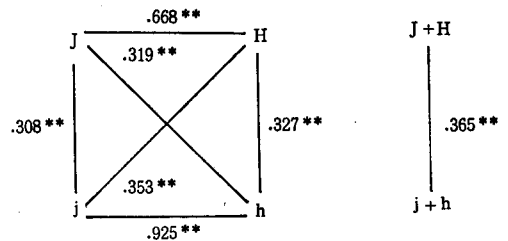


Fig. 2 熟知度・被熟知度相互の相関 ** $p < .01$

まず Table 1 のJとH、つまり各個人の熟
知度 合計と被熟知度 合計は、それぞれ平均が
165.7と166.4と近似した値を示した。またJと
Hとの相関を Fig. 2 にみると、 $r = .668$ ($p < .01$) と強い相関が認められる。さらに Table
2 は、各個人のJ・H 5段階ごとの選択数の相
関を求めたものであるが、J 1 (ほとんど何も
知らない) 選択数とH 1 (ほとんど何も知られ
ていないと思う) 選択数の相関 $r = .703$ をは
じめ、J 5—H 5の $r = .776$ まですべて1%

Table 2 熟知・被熟知対応段階ごとの相関係数

J 1—H 1	.703 **
J 2—H 2	.565 **
J 3—H 3	.530 **
J 4—H 4	.529 **
J 5—H 5	.776 **

** p<.01

水準での有意差が認められた。これらのことから、他者のことを知っているという意識と他者から自分が知られているという意識の総和は集団全体としてはほぼ同量で関連性の強いものであることが理解される。

なおここまでの分析では、自分がよく知っている者によって自分もよく知られていると判断しているかどうかの直接的な対応関係は調べられていない。しかしある程度の対応があると仮定すれば、J 1—H 1 および J 5—H 5 の相関が残りの中間的段階よりかなり高いことから、自分にとって心理的距離の疎遠な者と緊密な者とは特に明瞭に区別して意識されていると考えられる。

Table 3 熟知・被熟知5段階ごとの平均と標準偏差

	M	SD
J 1	14.8	15.53
J 2	18.1	8.90
J 3	22.2	10.95
J 4	8.6	5.99
J 5	3.3	3.54
H 1	15.3	14.74
H 2	18.0	10.12
H 3	22.7	10.93
H 4	8.1	6.62
H 5	3.0	3.44

Table 3 は、熟知・被熟知の5段階それぞれを個人がどれくらい選択したのかをあらわす。これによると、1個人がほとんどすべて知っている他者(J 5)は集団内に平均3.3人いることになり、ほとんどすべて知られている他者は平均3.0人いることになる。同様にかなり知って

いる他者(J 4)は8.6人、かなり知られている他者(H 4)は8.1人である。さらにすこしぐらい知っている他者(J 3)とすこしぐらい知られている他者(H 3)は各22.2人と22.7人である。そしてあまり知らない他者(J 2)とあまり知られていない他者(H 2)では18.1人と18.0人、ほとんど知らない他者(J 1)とほとんど知られていない他者(H 1)はそれぞれ14.8人と15.3人であった。熟知・被熟知の5段階ごとの人数もほぼ一致した結果がみられたわけである。この結果は集団の平均であり、個人差は割合に大きいかもしい。しかし67名のこの集団における熟知・被熟知という関係はだいたい上記の値ぐらいでバランスがとれるのかとも思われる。もちろん集団の性質や調査時期によって違いはあるはずで、今回の目的ではないが集団ごとのバランスの相違や時期による推移を調べてみるのも興味深いと思われる。

さて集団内の熟知・被熟知関係の基本的考察はこれくらいにして、Ambiguity Tolerance に関する考察に移る。Table 4 にみられるとおり、AT スコアと熟知・被熟知関係スコアは総

Table 4 AT得点との相関(r)

J	.086
H	-.147
j	.033
h	.199
J—H	-.317 **
J+H	-.031
j—h	.179
j+h	.118

** p<.01

体的に低い相関係数しか得られなかった。J (本人判断熟知度) との相関は .086であり、H (本人判断被熟知度) とは -.145とともに小さく有意差は得られなかった。すなわちクラス内の他者すべてについての熟知・被熟知の合計量と Ambiguity Tolerance には特別な関係は認められなかったということである。一般に集団内で適応を保つためには、個人の特性としての外向—内向次元とかかわりながらも、だいたい

これぐらいの数の人と知りあいつきあわなければならない、あるいは能力的、物理的にこれぐらいの数の人との接触量に収束するといった水準が形成されるのかもしれない、そこに Ambiguity Tolerance の高低はあまり関与しなかったと考えられる。

つぎに熟知度と被熟知度とのバランスについてみると、J と H の 差の絶対値は平均15.6で AT スコアとの相関は $r = -.318$ となって1%水準の有意差がみられた。このことは他者を知っていると判断する程度の総和と他者から知られていると判断する程度の総和の discrepancy の大きい人ほど Ambiguity Tolerance が低いことを意味している。自分は他者のことを一方的によく知っていると判断する傾向や、または他者のことはあまり知らないがそれら他者からはよく知られているはずだという傾向は、これが強すぎると集団内の自己の位置づけ、社会的な自己概念が不安定になりやすいと考えられることから、対人関係上なんらかの障害が予想される。

Table 5 には J 1 および H 1 への選択がまったくない者と AT スコアとの関係が示されている。J 1 回答数が0の者つまり「私はこのクラスでその人のことをなにも知らない人などひとりもない」とする者は LAT (Low Ambiguity Tolerance) に多くみられた。また H 1 選択数が0の者つまり「自分のことをなにも知らない人はこのクラスにひとりもない」とする者も HAT (High Ambiguity Tolerance) のほうに有意に多く認められた。66名の全メンバーについて J 1, H 1 に該当するものがひとりも

いないと判断することは、かなり極端な判断であると思われる。これらのことは Ambiguity Tolerance の低い個人が自己の知識のなかに空白部分の存在することを不安や不快に感じるためであり、また他者から無視されているのではないかという自己の不全感や疎外感を補償するためであると解釈される。

しかし極端な評価傾向あるいは二分化傾向が Ambiguity Tolerance の低い個人の特徴の一つとして確認されており (Rydell, S. T. 1966; 吉川, 1979), その傾向があらわれているにすぎないのではないかと疑問ももたれる。そこで J 5 や H 5 への選択0の人数を AT スコアの高低両群について比較するとほとんど差はなかった。したがって J 1, H 1 の選択皆無という現象は、単なる二分化であるよりも、Ambiguity Tolerance の低い個人の不安・不全感の反映と考えるほうが妥当であろう。

さて J, H スコアのレンジはそれぞれ 75—238, 74—249 と広範囲にわたっている。最低点の 74~5 は平均では 1.1~1.2 となり、「ほとんど何も知らない・知られていない」という判断が大半を占めている。一方最高点のほうは平均で 3.6~3.7 となり、「かなり知り・知られている」ということになる。このように熟知・被熟知度の個人差は大きい、実際に知っている、あるいは実際に知られている程度の個人差がどれほど大きいかは確認できていない。確実なことはそれらを判断する際の基準の個人差が大きく影響していることである。

J や H スコアに比べて j や h スコアのレンジはそれほど大きくなかった。平均で 2~2.9 ぐらいの範囲に収まっている。すなわちある個人について集団が知っているあるいはある個人から集団が知られていると集団 (個々のメンバー全体) が判断するスコアはだいたい同じようなスコアとなり、各個人の極端な判断傾向は中和されてしまうようである。

また j と h との相関は .925 と Fig. 1 のなかでも目立って高く、集団がある個人を知っている程度と、集団がその個人から知られている程

Table 5 HAT, LATのJ1およびH1選択数の比較

	J 1 選択数		H 1 選択数	
	0	1 以上	0	1 以上
HAT	5	30	3	32
LAT	11	21	12	20

$\chi^2=3.711$
 $df=1 \quad p<.10$

$\chi^2=8.051$
 $df=1 \quad p<.01$

度はたいへんよく一致している。このことも含めて Fig. 1 の全体的に高い相関を通して、他者を知ることと他者から知られることは相互的な関係であるといえるであろう。これらのことは世間での常識と思われているような内容を一部数値化したにすぎないかもしれない。

しかしながらこれから逸脱している人もいるわけで、つぎにこの点に注目してみよう。低い J スコアと高い H スコアをもつ人、つまり「自分は他者のことをそれほど知っていると思っていないけれども、他者からは自分のことをよく知られていると思っている人」である。熟知と被熟知の程度のギャップの大きい人ともいえる。この低 J 高 H の群の AT スコアは Table 6 に他の群のスコアとともに示される。分散分析の結果、 $F(3, 63)=4.378, p<.01$ が得られた。低 J 高 H 群の人は自分は他者のことをよく知らないけれども他者は自分のことをよく知ってくれていると感じる傾向が強いといえるわけであるから、曖昧な問題事態では他者の意見・同意を求めようとするよりも、即座に自己中心的な言動を呈しやすいのではないかと推察される。

Table 6 J・H高低各群のAT得点の平均と標準偏差と人数

		本人判断熟知度 J	
		高	低
本人判断被熟知度 H	高	159.6 21.4 n=27	131.3 8.5 n=6
	低	156.7 16.7 n=7	158.4 15.2 n=27

同様の分析方法を J・j について実施した結果が Table 7 に示される。高 J 高 j、低 J 低 j という熟知度一致群と比較して、高 J 低 j、低 J 高 j という不一致群の AT スコアは低い。 $F(3, 63)=3.844, p<.05$ という結果であった。自分が集団を知っていると判断する程度の総和と、集団がその個人を知っていると判断す

Table 7 J・j 高低各群のAT得点の平均と標準偏差と人数

		本人判断熟知度 J	
		高	低
他者判断被熟知度 j	高	165.5 19.0 n=22	147.0 15.0 n=12
	低	147.5 18.6 n=12	157.1 18.3 n=21

る程度の総和のくいちがいの大きい人は Ambiguity Tolerance が低いということであり、自己をその所属する集団と対等なものとして位置づけられない点に問題があるかもしれない。

ここまで J, H, j, h スコアの算出は 66 名についての、あるいは 66 名からの判断を加算して求めたものであることは既述のとおりである。J 2 を 2 点、J 5 ならば 5 点として得点化の際の重みづけを行なってきたわけであるが、これが妥当であったかどうか疑問が残る。たとえば J 2 と J 3 の間は「知らない」と「知っている」の分岐点になっており、他の間隔の 1 点とは異なる意味があるのではないか。また J 5 という選択肢はあまり選ばれず、あるいはきわめて慎重に選ばれ、J 4 の 1 点上位という量的な問題だけでなく、自分にとってかなり重要な意味のある人物にしかつけられないのではないかとの印象がもたれた。

こうしたことから、単独の項目ごとへの選択数を Ambiguity Tolerance の高低両群について調べてみることにした。全部で 20 の χ^2 検定結果のうち、有意差のみられたのはわずかに h 2 のみであった。LAT のほうが HAT よりも h 2 と判断された人数が多かったのである。 $(\chi^2=9.316 \text{ df}=1, p<.01)$ すなわちその個人からはあまり知られていないであろうとの集団各員の判断が、Ambiguity Tolerance の低い群に多く集中したわけである。h 1 と h 2 の合計についても LAT のほうが有意に多く、一方 h 4 では弱いながらもこの逆の傾向がみられたことから、Ambiguity Tolerance の低い人

は集団内のより多くの人から「私はあの人にあ
まり知られていない」と感じられているといえ
よう。つまり心理的距離のより大きい存在とし
て受取られているのである。

以上は各個人のスコアについての考察であっ
た。つぎには個人間の熟知・被熟知の相互関係
を調べてみたい。クラス集団内でお互いに評定
しあったのであるから、相手との直接的関係を
焦点をあててみよう。

まず、自己が相手を知っているとする段階と
その相手がその自己を知っているとする段階を
比較した。自己のほうを基準として考えた場
合、両者の関係はつぎの3つに分けられる。①
自己のほうが相手を知っている段階が高い。
($J>j$) ②自己も相手も知っているとする段階
が等しい。($J=j$) ③自己のほうが相手を知っ
ている段階が低い。($J<j$) これらについてま
とめた表が Table 8 である。表中の「一致」と
あるのはもちろん上記の②のことであるが、相
互によく知りあって一致している場合もあれ
ば、ほとんどないにも知らない同志という点で
一致している場合もある。その一致数の平均
27.8というのは、66人の相手のうち約28人と熟
知度判断が相互に一致したということである。

Table 8 Jとjのdiscrepancy段階とATとの
相関

	自己 熟知 度 判断	他者 熟知 度 判断	AT との 相関 点	平 均 (標準 偏差)
一致	J = j		.203 [†]	27.8 (5.43)
自己の相手 熟知過大	J > j (2段階以上)		-.032	4.4 (4.25)
"	J > j (1段階)		-.017	14.7 (8.61)
"	J > j (総計)		-.024	19.1 (11.75)
自己の相手 熟知過小	J < j (2段階以上)		-.150	4.2 (6.01)
"	J < j (1段階)		.011	14.9 (7.48)
"	J < j (総計)		-.068	19.1 (12.04)

† $p<.10$

さて Table 8 にあるように、その一致数の多
さと AT スコアとの相関は $r=.203$ で10%水
準の有意傾向が得られた。視点を変えれば、相
互的な熟知度判断の一致は Ambiguity Toler-
ance の高い人同志の間でよりよく一致したと
も読みとれる。ここで注意すべきことは、Am-
biguity Tolerance の高い人同志がよく知りあ
っているということではけっしてないことであ
る。一方的によく知っているとか、知られてい
るというのでなく熟知度判断が相互に同じ水準
にあることを意味する。この同水準の相互熟知
が対人関係上望ましいかどうかここでは考察し
うるだけの資料を欠いている。ただ相互に交友
関係があって自己開示がなされていれば、ある
いはそれらがなければならぬものとして、相互
の熟知度判断は似たものになるのが自然であると
考えられる。したがって同水準の相互熟知はす
くなくとも歪曲のない通常の対人関係を示すも
のであると思われる。

つぎに相互の熟知度が2段階以上くいちがっ
ている場合は66人中平均4.4人と少なく、1段
階の場合は14.7人の相手ということになるが、
その数と AT スコアとの相関はまったく小さい
ものであった。自己より相手のほうが自己をよ
く知っているとする方向での Discrepancy に
おいても AT スコアとの相関はみられなかつ
た。

Table 9 では自己が他者から知られていると
判断する段階、すなわち被熟知度 H と、その他
者がその自己を知っているとする段階、すなわ
ち他者判断熟知度 j との関係を調べた。H と j
の段階の一致数と AT スコアとの相関はきわめ
て小さいものであった。

有意差が認められたのは、 $H>j$ についてで
あり、自分が知られていると思うほどには実際
相手は自分を知っていないという discrepancy
が1段階で AT スコアとは負の相関 $-.285$,
 $p<.05$ であった。また $H>j$ 合計でも $-.229$,
 $p<.10$ という結果が得られた。

$H<j$ 、つまり自分はそれほど知られていると
思っていないのに相手が知っているとする段

Table 9 Hとjのdiscrepancy段階とATとの相関

	自己被熟知度 自己判断度	他者被熟知度 他者判断度	A Tとの 相関 得点	平 均 (標準 偏差)
一致	H=j		.041	27.4 (5.93)
自己被熟知度 過大評価	H>j (2段階以上)		-.086	3.9 (4.70)
"	H>j (1段階)		-.285*	14.0 (8.80)
"	H>j (総計)		-.229†	17.9 (11.96)
自己被熟知度 過小評価	H<j (2段階以上)		.136	3.7 (4.71)
"	H<j (1段階)		.239†	16.5 (7.76)
"	H<j (総計)		.224†	20.2 (11.16)

† p<.10 *p<.05

階のほうが上回るという discrepancy では、1段階で AT スコアとの相関+.239、合計で+.224と有意な傾向がみられた。

H>j と H<j とで AT スコアとの相関が正負逆転した結果となっている。H>j の自己を実際以上によく知られていると判断する傾向は、第三者的視点からすれば自信過剰的またはうぬぼれが強いともみられる。こうした人の Ambiguity Tolerance は相対的に低く、自己洞察が不十分で対人関係における認知の正確さが劣っているのではないかと解釈される。Table 6 の低J高Hと同様、対人関係上の問題では自己の考え方は他者によく理解されていると思ひ込みやすく、独断的・短絡的な行動をとりやすいであろうと推測される。

H<j の実際以上に自己は他者から知られていないと判断する傾向は Ambiguity Tolerance の高いことと関連したが、これも自己洞察が十分でない結果とみることができる。ただしこれは自信の不足という面もあるかもしれないが、他者への理解を求め控え目な行動をとりやすいであろうため、対人関係上の問題はそれほどないと考えられる。

Study II

1. 目的

Study I の後半に対人関係を相互的に把握することを試みた。それにひき続いて Study II では対人関係と Ambiguity Tolerance の関わりをソシオ・メトリック的に調べようとするものである。集団内での人の結びつき、グループ形成に Ambiguity Tolerance がどのように関与するであろうか。はたして Bellak の述べるように Ambiguity Tolerance の高低によって集団がいくつかの小集団に分割されるかどうかに関心が集中する。

2. 方法

対象は保育専門学校1回生の1クラス49名(Study I の次年度生)に対して、精神衛生に関する内容のグループ発表に際して、「同じグループになりたい」および「別のグループになりたい」者を各4名を限度として記入させた。4名を越えて記入したものや1名も記入しなかったものは除外し、最終的な分析対象がさきに記した49名である。

集団構造マトリックスの作成には CES (コンピュータ教育システム) の『集団分析システム・ソシオメトリック・テスト』を用いた。

Ambiguity Tolerance の測定は Study I と同じく Norton の MAT-50 邦訳版を使用した。

3. 結果と考察

集団構造マトリックス (ST=2) を Fig. 3 に示す。なお今回使用したソフトのマトリックス作成プロセスは以下のように説明がなされている。なお ST=2 というのは「何段階の生徒まで1グループとするか」の指定において、「2. か8. で選んだものと相互選択の者を選びその生徒と相互選択の者までを1グループとする」を採用したものである。全体の相互選択数が少なかったこともあって ST=1・2・3 のいずれも

選 択	1 224 3601985927	111221112234433343131223 44 322 31 34445 1856956341154690820728933381027424754670	C	R	S	m	c	m	r	mc	mr	iss
13	6											

Fig. 3 集団構造マトリックス ST=2

○: 選択 ●: 相互選択 ×: 排斥 *: 相互排斥 C: 被選択数 R: 被排斥数
CRS: C-R mc: 相互選択数 mr: 相互排斥数 mc・mr: mc-mr
Isss: 社会測定の地位指数 S: 人気者 F: 周辺児 I: 孤立児

このソフトでは、集団構造マトリックスを以下の手順で作成します。

1. 各人の社会測的地位指数（以下指数と呼ぶ）を算出する
2. 指数の一番高い生徒を選び出す
3. この生徒と相互選択の関係にある生徒を選び出す
4. 選ばれた生徒と相互選択の関係にある生徒を選び出す
5. 4.で選ばれた生徒と相互選択の関係にある生徒を選び出す
6. これを相互選択の関係がすべてとぎれるまで続ける
7. 2. ～6. まで選ばれた生徒を指数の高い順に並べる
8. 残りの生徒の中から指数の最高値の生徒を選ぶ
9. 同様に3.以降の作業を相互選択の関係がなくなるまで繰返す
10. 以上の作業で並べ換えられたもの順に並べて表にする

このような 2.～6. の作業で取り出された生徒を一つの集団としますが、クラスのまとまりがよいと全員で 1 グループの結びつきを示し、少人数の関係が把握できない場合があります。これを細かく見るためにグループ化するとき、結びつきの段階を制限することができるようになってあります。上の一連の作業を行なうときに 2. あるいは 8. で選びだした生徒から数えて、何段階の生徒まで 1 グループとするか、指定することができます。

上位グループの構成に変化はなかった。Fig. 2にみられるように、少人数のグループが多数形成され、細分割された状態といえる。

グループ内の相互関係が比較的密であると思われる上位3グループを例にとってATスコアを比較してみる。平均のみで比較すると145.8, 192.6, 153.2と差はかなり大きいようである。分散分析の結果では $F(2, 12)=14.657$ $p<.01$ という有意差が得られた。またグループの人数が3名以上の上位7グループについては $F(6, 26)=7.310$ $p<.01$ であり、全11グループについても $F(10, 30)=5.558$ $p<.01$ という有意な結果が認められた。

したがって、グループの規模は小さいけれども、Ambiguity Tolerance という特性の比較的近似した者同志がグループを構成する傾向が確認されたと考えられる。この結果は Bellak のいうエッグ・ヘッドとスクウェア・ヘッドという曖昧さに対する態度の異なる集団の存在・形成についての考えを支持するものとみなされる。

Fig. 4 にはグループ1～11ごとのATスコアの分布状況を図示してある。明確なグループを構成しなかった8名についてみると、ATスコアの高低両極端(208—103)が含まれている。以前の結果(吉川, 1980)では Ambiguity Tolerance の高いことは総体的にはよりよい適応性と結びつくことが示されているが、今後はこうした高低両極端者についてケース・スタディを行なってみる必要性が感じられる。またこれからグループを構成しなかった者にATスコアの低い者がたいへん少なかったことから、Ambiguity Tolerance の低い者は同調性が強く、孤立周的存在になりにくいことが示唆される。

Table 10 は AT スケールのサブ・カテゴリー別スコアをグループごとに詳細に示した表である。たとえばATスコアの差が大きかったグループ1とグループ2について、サブ・カテゴリーのスコアを比べると、かならずしもその差は Interpersonal Communication や Social のみにあるのではなく、Habit や Problem Solving など全般にわたっていることがわかる。す

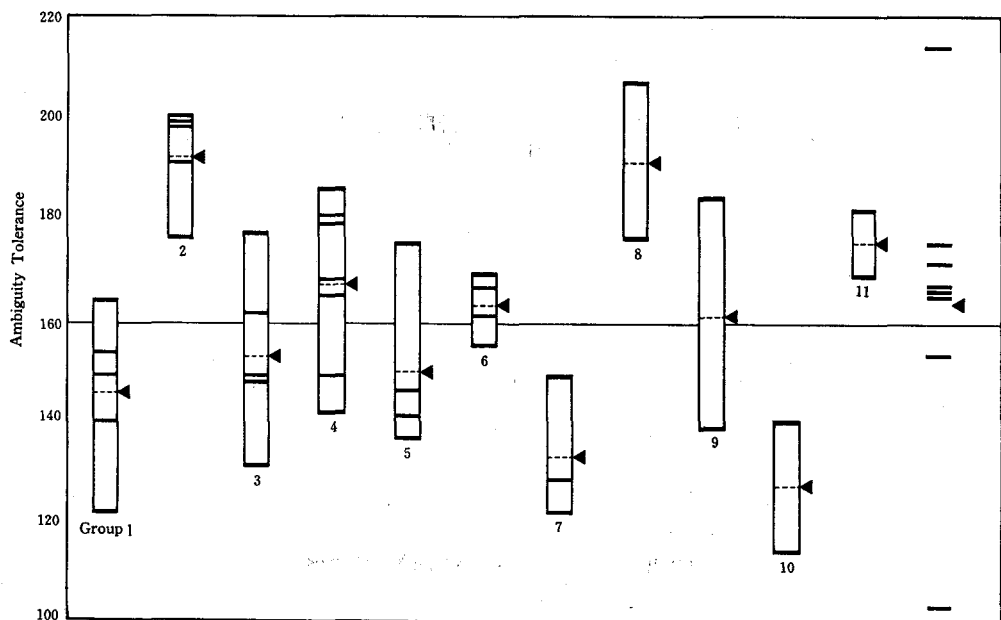


Fig. 4 下位集団 (Group1~Group 11) ごとの Ambiguity Tolerance 得点の分布状況 (◄: 各グループの平均を示す)

Table 10 下位集団の Ambiguity Toleranceスケールのサブ・カテゴリー別得点の平均と標準偏差
()内はSD

	Philosophy	Interpersonal Communication	Public Image	Job-Related	Problem Solving	Social	Habit	Art Forms	AT Total
n									
Group 1 5	18.2 (4.96)	11.6 (2.24)	9.4 (2.24)	11.2 (1.47)	21.2 (3.76)	21.2 (2.23)	25.6 (4.59)	27.4 (1.74)	145.8 (14.20)
Group 2 5	22.0 (1.90)	17.2 (3.66)	13.0 (3.10)	14.8 (1.60)	31.4 (3.93)	27.0 (2.68)	38.6 (4.08)	28.6 (1.50)	192.6 (8.85)
Group 3 5	21.2 (2.48)	12.8 (1.72)	11.4 (2.87)	12.2 (1.83)	27.0 (1.79)	20.6 (4.32)	29.4 (6.97)	23.4 (1.36)	153.2 (15.43)
Group 4 7	20.7 (3.77)	13.9 (2.03)	12.0 (2.98)	12.7 (1.75)	23.1 (6.38)	21.9 (6.20)	35.3 (4.65)	27.0 (2.00)	167.1 (15.38)
Group 5 4	20.0 (1.87)	10.5 (2.29)	10.3 (2.59)	10.8 (2.38)	24.5 (4.03)	20.0 (1.73)	26.5 (3.91)	26.3 (1.92)	150.0 (14.87)
Group 6 4	21.0 (1.87)	10.8 (1.30)	11.3 (2.28)	11.0 (1.87)	25.5 (5.32)	21.5 (1.12)	32.8 (1.92)	29.3 (1.79)	163.0 (5.48)
Group 7 3	16.0 (4.32)	11.0 (0.82)	10.0 (2.94)	8.3 (1.25)	23.0 (6.53)	16.0 (2.83)	25.7 (6.24)	23.0 (3.56)	133.0 (11.58)
Group 8 2	22.5 (1.50)	16.0 (2.00)	14.5 (4.50)	17.5 (1.50)	24.5 (6.50)	26.5 (5.50)	44.0 (7.00)	26.0 (2.00)	191.5 (15.30)
Group 9 2	15.0 (2.00)	11.0 (0.00)	8.0 (2.00)	9.5 (0.50)	28.0 (5.00)	22.0 (2.00)	39.5 (13.5)	28.0 (6.00)	161.0 (23.00)
Group 10 2	22.0 (4.00)	8.0 (0.00)	9.5 (2.50)	9.5 (1.50)	23.0 (2.00)	19.0 (2.00)	25.0 (2.00)	26.0 (1.00)	127.0 (13.00)
Group 11 2	21.5 (1.50)	8.5 (1.50)	14.0 (0.00)	12.5 (0.50)	32.5 (2.50)	20.5 (0.50)	35.0 (1.00)	30.5 (2.50)	175.0 (7.00)
8	20.0 (5.34)	13.3 (3.11)	12.3 (3.31)	10.5 (2.60)	24.0 (5.96)	22.6 (5.17)	33.5 (7.73)	27.4 (4.18)	163.5 (27.32)

なわちグループ形成にあたっては Ambiguity Tolerance の社会対人的側面のみが機能しているのではないようである。

要 約

これまでの研究経過においてAmbiguity Tolerance (AT) は個人の人格特性としてばかり調べられてきた。そこで個人間の関係に注目し、学級集団内の対人関係への AT の関与を扱うこととした。

Study I では保育専門学校1回生1クラスを対象として、他者のことを知っている程度としての熟知度と、他者から知られている程度としての被熟知度を5段階評定させた。一方 AT の測定には Norton (1975) の MAT-50 邦訳

版を用いた。おもな結果としては、AT の低い者は自己の不安や不安全感から極端な判断傾向を示したり、熟知と被熟知の discrepancy が大きく自己中心的な対人関係様式をとりやすかったりするのではないかと解釈された。

Study II では Study I と類似の対象に、グループメンバーとしての選択・排斥の記述を求め集団構造マトリックスを作成した。多数のグループに細分化されたが、上位の緊密関係グループではグループごとの AT の差が顕著に認められた。グループ形成においても AT が関与する可能性が確認された。

引用・参考文献

Bellak, L. 1970. The Porcupine Dilemma. 小此木啓吾, 山アラシのジレンマ, ダイアモンド社, 1975.

- Block, J. & Block, J. 1951. An investigation of the relationship between intolerance of ambiguity and ethnocentrism. *Journal of Personality*, 19, 303-319.
- Crandall, J. E. 1969. Self-perception and interpersonal attraction as related to tolerance-intolerance of ambiguity. *Journal of Personality*, 127-140.
- Davids, A. 1955. Some personlity and intellectual correlates of intolerance of ambiguity. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 51, 415-420.
- Frenkel-Brunswik, E. 1949. Intolerance of ambiguity as an emotional and perceptual personality variable. *Journal of Personality*, 18, 108-143.
- Norton, R. W. 1975. Measurment of ambiguity tolerance. *Journal of Personality Assessment*, 39, 6, 607-619.
- O'Conner, P. 1952. Ethnocentrism, "Intolerance of ambiguity," and abstract reasoning ability. *Journal of Abnormal and social Psychology*, 47, 526-530.
- Rydell, S. T. & Rosen, E. 1966. Measurement and some correlates of need-cognition. *Psychological Reports*, 19, 139-165.
- 吉川 茂 1979. 評定尺度における二分化と Ambiguity Tolerance. *臨床教育心理学研究*, 5, 16-21.
- 吉川 茂 1980a. Ambiguity Tolerance の程度と適応性. *関西学院大学文学部教育学科研究年報*, 6, 35-39.
- 吉川 茂 1984. Ambiguity Tolerance-Intolerance における不安の影響. *臨床教育心理学研究*, 10, 7-11.
- 吉川 茂 1986a. 曖昧さへのトレランスーイントレランスの基本的相違点に関する研究. *関西学院大学人文論究*, 35, 4, 94-121.

(1989年1月11日受理)